



小人<sup>パ  
ル  
ク  
ム</sup>族  
の  
冒  
険  
・  
上

novels

大森藤ノ

illustration

はいむらきよたか

ディムナは聡明な子だった。

彼は零歳児からの記憶がある。母親の胸に抱かれていたことも、村の他種族の住民にいつも腰を低くしていた父親の姿も、全て覚えていた。

ディムナは小人族だった。

どの種族よりも体は小さく、どの種族よりも力がない。最も潜在能力が低いとされる亜人種。頻繁に嘲弄され、往々にして搾取される。多くの種族が混在し生活を営む山間部の村里の中で、小人族は弱者であった。ディムナが生まれた直後から、同胞達は村人から理不尽な要求を押し付けられてばかりだった。

馬鹿にされ、何も言い返さず、時には奪われていく両親を、賢いディムナは嫌った。

小人族というだけで何もかも諦めたように笑い、自身を卑下する父親と母親を唾棄した。

何故知恵を絞らない。

何故大きいだけで相手に屈する。

何故『架空の女神』のように立ち向かわない。

両親だけでなく、いつもうつつむいている他の同族達も、ディムナを苛立たせた。

小人族の中でディムナだけは他種族の村人にへりくだったりはしなかった。彼は村で稀少な本を村長の家で何度も盗み読み、貪欲に知識を増やした。世界の歴史、村の外の世界、更に『架空の女神』をはじめとした英雄譚を知ったのもこの時だ。書齋で何百冊、何千冊を読み耽る姿を発見した村の村長に「まるで賢者のようだった」とまで言わしめた。ある時には頓智とんちを利かせて村人達に一泡吹かせたこともある。一部の者から返ってくるのは生意気だと言わんば

かりの拳や蹴りだったが、ディムナは斜に構えて甘んじてみせた。

自分はあんなみじめな両親とは違ふ。同胞達とは異なる。

嫌悪感と矜持が渾然となるその一心で、まだ幼かった少年は種族の宿命に反発し続けた。

やがて時が経ち、ディムナが十歳の時。

彼は命を失いかけた。

山にひそむ怪物どもの真夜中の襲撃だった。村のあちこちから火の手が上がり、他種族の大人達が懸命に応戦する中、ディムナは恐怖と戦いながら奔走した。両親の制止を振り切り、いつも己を苛めようとする悪童達や女子供を逃がし、火の手を消して回った。女神として擬神化された太古の英雄達のように、勇断をなそうと躍起になった。

しかし、幼い小人族のそれは『勇氣』と呼べるものではなく、蛮勇ですらなかった。だから、モンスターの牙が目前へと迫った。

学んだ知恵が彼に慢心をもたらし、失敗を招いた。彼はちつぽけな矜持の言いなりになり、身の程を弁えなかった。百の知識が愚かな暴力にあつさり蹴散らされることを、ディムナはその時、身をもって知ったのである。

そして。

今にも顎に喰らわれようとするディムナを守ったのは、父親と母親だった。

牙に貫かれた父親と母親は、身を挺して子を守ったのである。

その一方で、小人族の同胞達はディムナと両親を捨て、逃げ出した。

ディムナは、逃げ出した同胞達に小人族の絶望を見た。

そして、己より巨大な怪物に立ち向かい自分を守った父親と母親に、『勇氣』という名の、小人族の希望を見た。

涙で滲む視界の中、爪で小さな体を貫かれ、血にまみれながら笑う両親の姿に、一族の『光』を見出したのだ。

駆け付けた他種族の大人達の手でモンスターが討たれた後、ディムナは叫んだ。

この世に生を受けてから今まで溜め込んできていた、感情の発露だった。

大人達から差し伸べられる手を振り払い、涙に濡れた両親の遺骸の前から駆け出し、夜の森を衝動のまま走った。闇の空から降り始める雨にも構わず、何度も転んで、切り傷を負う手足をも無視し、川べりへと飛び出した。ただ一人、空に向かって泣き続けた。

一夜が明け、雨も止み、その美しい碧眼から涙が涸れた頃。

ディムナの顔付きは変わっていた。

まるで真理を得たように。

山頂から黎明の光が差し、せせらぎがきらめき、一匹の鮭が飛び跳ねた。

その後、ディムナは己の姓名を捨てた。

自分の手で父親と母親を墓に埋めた時、彼等に由来するもの全てを返したのだ。彼等から授かった『ディムナ』という名前だけを除いて。

代わりに、自らを『フィン』と名乗った。

『フィン』——小人族の言語で『光』を意味する言葉。

全ての覚悟をその名に秘め、少年は村を出た。

一族の再興を。

生まれてくる新たな命に希望を与える、小人族バルクムの光を。

己の全てはそれに捧げられる。

始まるのあの日から疼くようになった親指が、囁き声を上げる。

お前では無理だ、と。

現実を見ろ、と訴えてくる。

「黙っている。僕はやると決めた」

齡十歳。

賢く、聡明で、野望を持つ『フィン・デイルムナ』は、この時をもって完成した。

あまりにも早過ぎる完成であった。

これより遠い未来、彼の迷宮都市で第一級冒険者に上り詰めた後も、彼は『フィン』であり続ける。自分を救い希望を見せた両親に報いるため、一族への絶望をも覆すあの光をもたらすため、小人族の全てを変えるために。

これは、後に【勇者】と称えられる男の物語である。



風を受けて、風車の羽根車が回っている。

大広場できらめく噴水に、軒を連ねる店々で商いをされる果物や穀物、川辺で釣られたばかりの魚。収穫祭でも近いのか、紐に通された色とりどりの旗が青空の下で揺れている。

賑やかな喧騒が、人々が住まう村を満たしていた。

「はっはっ！ いいなあ、下界はあ！」

ヒューマンと巫人達が往来する大広場で、喝采を上げる一柱の神がいた。

髪の色は黄昏時のような朱色、瞳は狐の目のように細まった糸目。異常なほど整った顔立ちと細身な体は装い一つで女性にも男性にも見えるだろうが、歴とした女神である。

青い水を飛ばす噴水を背にする神、ロキは、視界に広がる光景に両腕を広げる。

「退屈な『天界』とは違って賑わって、ごちゃごちゃやって、何よりこの活気!! 死んだ魚の目をしとる神々みたいなのもおらんし、生に溢れとるわ〜! う〜ん、わくわくする〜!」

ロキは『天界』から降りてきたばかりの神だった。それこそ半日前、村外れの平原に降り立ち、人の気配がするこの村までえつちらおつちら移動してきたばかりだ。

『無駄』と呼べるものが愛しいほど溢れている。

他者との繋がりで成り立つ『社会』が、人々の『営み』が存在する。

雄大でどこまでも広く、寂しいほど静かな『天界』とは大違い。何もかもが新鮮だ。あらゆるものが刺激的だ。

倍率甚だしい他の神々を蹴落としてもぎ取った、念願の地上への降臨。

下界の者が生きる今日という景色を生で目にし、感動もひとしおであった。

何よりわくわくするのが、自分も『神』という役職として、地上の住人の一人になったことだ。

「美神<sup>トレイヤ</sup>とか強神<sup>トール</sup>には先越されとるからなあ〜。うちも『私が考えた最強の【ファミアリア】ッ!』を作るんや〜!」

喧騒に紛れて子供のようにはしゃぐ。すぐ側を駆けていく獣人の幼子達を目で追いながら、唇に微笑みを浮かべた。

「『約束の英雄』とかは興味ないけど……やるからには一番なりたいたいもんな〜」

ざわめきの中に消える呟きを発したロキは、よし、と力を入れた。

今からやることのために、すう〜、と口から大きく息を吸い込む。

背を反って溜めた瞬間、思い切り叫んだ。

「誰かあ〜!! うちの【ファミアリア】に入らん!?!」

道のど真ん中で上がった大音声に、ぎよっと人々の視線が集まった。

しかしそれが神の仕業だとわかると、通行人は全てを察したように歩みを再開させる。

「ありやー、無視や。下界の子は冷たいなあ。ま、ええわ！ 直接口説きにいったる！」

何度か叫んだが効果はなく、ロキは自ら動くことにした。

意気揚々と、見かけた巫人——可愛く美しく若い女性のように声をかけ始める。

「お、そのべつびんさん！ うちのファミリアどうやー？」

「し、失礼しまーす」

「何と今ならウチと二人っきりの【ファミリア】！ うちの初めてもらってやー！」

「あはは……ごめんなさい」

「へーい、そのイカすエルフたん、うちと契約という名のエンゲージせんかー！」

「不愉快だ、消えろ」

ヒューマンに、獣人に、エルフに。その他三十名以上もの女性に。

ことごとく申し出を断られたロキは、下界という名の現実を叩きつけられた。

「もうー！ みんないけずやあー！ ちゅうか難易度高すぎー!!」

これがなしのつぶてかー！ と軟派もとい勧誘が全敗したロキは天を仰いだ。

噴水のある大広場まで戻り、がつくりと肩を落とす。

「こりやアレや、先に来とつた神連中の素行が最悪で『触らぬ神に祟りなし』つちゅうまさにそんな感じになつとるんや！ くそつ、アホ神どもめッ！」

概ね間違っていないのだが、自分の素行の悪さも棚に上げるロキ。スケベ親父も同然で女の

子に声をかけまくる彼女には、既に迷惑そうな一瞥が投げかけられるようになっていった。

「……でもまあ、神は地上に降りた時が一番大変、ちゅうのもよくわかるなあー」

こんな口の口なんやろうけど、とも眩く。

【ファミリア】神と眷族けんぞくは一心同体。恩恵を授かる代わりに眷族は使いつ走りになる。下界の住人の間に広まっている共通認識であり、間違いではない。仲の悪い主神同士の抗争などといった危険性ケンケンなども併発する。平和の生活に刺激スリルを求めて、そんな軽い気持ちで入団しようものなら痛い目に遭うこと必至だ。【ファミリア】を選ぶ上で最も重要なのは主神が神格者じんかくしゃであることとまで言われている。下界の住人はこの時ばかりは見定める側であり、神の本性を見極めなくてはならない。

「平和そうな村つてのもあるのかもなあ。モンスターも外壁と衛兵のおかげで来ないみたいやし、『恩恵』を授かった眷族なんて必要ないのかもしれない」  
ロキがいる村の名前は『ブレブリカ』という。

山の麓、川辺に沿って造られた村だ。

建物は石造り。道にもしつかりと石畳が敷き詰められているのは山を迂回する行商の道程上、馬車と商人が頻繁に立ち寄るため整備したものらしい。伴って宿も多かった。村と言うには大きく、街とは呼ぶには小さい、そんな微妙な場所だった。

だがロキはこの村を気に入った。まず可愛い女の子が多いのがいい。噴水がある村の中心の大広場では幼子達が笑みを浮かべて走り回っている。大きな風車はこれぞ下界という趣がある。しかしスタート地点を間違えたかなあ、あえて辺鄙なところを狙ったんやけど、とロキが青い空を仰いでいると、

「——見つけた」

そんな声が、聞こえてきた。

「ん？」

空から地上に視線を戻すと、往来する人々の切れ間から見えるのは、一人の少年だった。